

第4回「外国人」

今回はアスマラ在住の外国人をご紹介します。

前回は少し触れましたが、エリトリアは近代史においてイタリアとイギリスの植民地でした。イタリアによる統治は、イギリスによる統治よりも前ですが、期間が長かったためイタリアの影響のほうが圧倒的に強く残っています。例えば高齢者は皆流暢なイタリア語を話しますし、建物や食べ物もイタリアの影響を強く受けています。

エリトリアの首都アスマラには少なからず外国人が居住しています。彼らの多くは、様々な国連機関、例えば United Nations Missions in Ethiopia and Eritrea (通称 UNMEE、エチオピアとの国境紛争後、平和維持活動をしています) や大使館、国際機関の関係者です。アジア人は小中高校で英語教育を行っているたくさんのインド人を筆頭に、少なからず在住しています。日本人は僕の知る限り6人、韓国人も建設関係者が結構いるようです(見かけませんが)。中国人は鍼灸、建設関係、貿易関係に従事しています。最近では医学校が創設されたため、教師としてキューバ人が招かれたようです(キューバの医療技術の高さと、歴史的な外交関係によります)。他にもアラブ人や他のアフリカ諸国人もたまにみかけます。

ここでエリトリア人の外国人分類法をご紹介します。主要な分類は3つあります。1. 「イタリア人」、2. 「中国人」、3. 「アフリカ人」です。まず「イタリア人」ですが、これはイタリア人だけを指すものではありません。全ての白人が「イタリア人」と呼ばれます。同じように、全ての東・東南アジア人は「中国人」と呼ばれます。これら二つの分類は外見的共通性によるものです。さらに、アジア人は黄色人種としてではなく白色人種として捉えられています(確かに黒人ではないですが)。最後に「アフリカ人」ですが、これは他のアフリカ諸国人すべてを指します。一説によると、ティグレ語というエリトリアの主要言語には文字がありますが、エリトリア人は自分たちと、文字を持たないアフリカ諸国民を区別して捉えているということです。

エリトリアは観光産業も未発達で、外国人の絶対数は多くないので、外国人はまだ珍しい存在です。外国人として得することもあります。例えば僕がたまに行くパン屋では、夕方になると行列ができますが店の主人は「外国人はお客さんだから」といって、僕を優先的に扱ってくれます。いずれにしても、アスマラ在住の外国人が異口同音に言うのは、十把一絡げに分類されたり「イタリア人」とか「中国人」とか呼ばれたりするのは、決して気持ちの良いものではないということです。もうひとつ気が付くのは、エリトリア人は本当の白人(欧米人)にはかなわないという意識があることです。これは過去にアフリカ全土が主に西洋諸国によって分割、植民地化されたからのようです(Scramble for Africa と呼ばれます)。

次回は外国人として暮らすアスマラでの生活の一部をご紹介します。

(森下義亜)



イタリア風の家